

## 1. 教材について（指導用メモ）

### アート（思考）とデザイン（思考）の違い

- ・アート思考・・・問う力
  - ・デザイン思考・・・問題の本質を見極め、解決へと向かうアイデアを凝縮していく力
- デザイン思考では解決すべき問い合わせがあり、それに対して多角的な視点で解を出すことが重要とされる。一方、アート思考では、一見意味がないと思われることや当たり前のことに対する、新鮮な問い合わせを見つけていくということが重要である。本授業のワークを通して、生徒にアート思考には正解がないということに触れてもらう。

### 美術史から「アート」を考える

- ・カメラが発明されて以降（印象派以降）の歴史からアートとはどういうものなのか、美術史に残る作家、作品を取り上げて考える。  
例：アンリ・マティス、パブロ・ピカソ、マルセル・デュシャン 他
- ・美術では「上手い」という理由で歴史に作品が残っているわけではなく、「新しい」価値観を創造したことにより作品が残っている側面があるということを理解する。
- ・（参考）「新しい」価値観の創造には、今ある価値観にとらわれず、誰も気が付かなかつたような「問い合わせ」を生み出し、探究し続けることが重要。

### 現代アートからヒントを得る

現代アート作家の作品（今回は、瀬戸内芸術祭に出品している作家さんや、名和晃平さん、長谷川愛さん、その他自分自身が実際に見た作品、体験した作品など）を話題にしつつ、具体例として作品を幾つか提示する。アート作家（アーティスト）が問い合わせをたてる段階やそこから作品にするまでの課程から、アート思考のヒントを得る。

### デッサンを知る

美術系大学へ行く人たちが最初に行う訓練であるデッサンを見せ、何を目的にデッサンをやっているのか考えてもらう。実は、描く技術の向上だけでなく、目の前にあるものを「見る」練習をしている。

（ポイント）

- ・目の前にあるものを本当にちゃんと「見て」いるか？
- ・観察する（見る）ことからアート思考は始まるのではないか？
- ・どのようなことに興味を持ち、どのようにそこから探究していくのか？

## 2. ワーク

生徒にはワークを通して、頭で考えるだけでは「当たり前」から抜け出せないこと、そして、手を動かすことでの、「当たり前」から抜け出す体験をしてもらいたい。

### 準備：

- ・グループに分かれる。
- ・こちらで用意するもの：  
ピンセット、黒や白の全判の紙（台紙）
- ・本授業の持ち物：  
物の数が多いものを用意してくるように伝えておく。  
例：マカロニ、砂、クリップ、ふりかけ、木の実、輪ゴムなど（※）

### 内容：

「数えきれないほどのもの」を並べなさい。

グループごとに用意された1枚の台紙の上に、生徒が各自用意したもの（※）をひたすら並べる。並べたものを観察する。

### 指導のポイント：

- ・想定される生徒の思考・・・「並べて何の意味があるの？」と考えてしまう。  
→それこそが「アート思考」からは一番遠い思考になっていることに気がついてほしい。  
→ゴールを設定してそこに向かっていくというのは「アート思考」ではない。  
→ゴールありきのワークをやってもアート思考にはならない。
- ・ひたすら並べ続けると、並べていくうちに気がつくことや見えてくることがある。  
普通だと思っていたものが普通ではなくなる瞬間がある。
- ・アート思考の本質は、  
どのようなことに興味を持ち、どのようにそこから探究していくのか。  
「自分のものの見方」で世界を見つめ、好奇心に従って探究を進めるのか。  
→自分のものの見方、自分なりの問い合わせを生み出す、その片鱗をこのワークで体験する。

(参考) ワークの様子

